

植物着抜染技法の発色見本

Some Shade Variants of Exchange Mordanting

谷 誉志雄

TANI Yoshio

1. はじめに

植物染料を使った染色には、原初的な感覚を呼び覚ます愉悦がある。それはまず染液を煮出すときに立ちあがる香りによって始動するだろう。植物染料は、有用な色素を含んだ植物の葉、実、花蕾、根、幹材のチップなどを乾燥させた染色素材である。これらの植物のいくつかは、古くから薬やスパイスとしても利用されてきた。すおう（蘇芳）やログウッドのように、煮出し始めてすぐに鮮やかなワインレッドの染液を放出するものもあれば、かりやす（刈安）やびわの葉のように、数十分煮ることで黄金色の染液が徐々に滲み出てくるものもある。香りもまた多様である。インド茜には、エキゾチックな料理を想起させる南方的な含みがある。えんじゅ（槐）の花蕾を煮ると、透明感のある金茶の染液とともにハーブティーを想わせる濃密な芳香が立ちのぼる。

美術教材としての植物染料の魅力は、何よりこのような原始的で全感覚的な体験にある。古代から生活に密着した色として利用されてきた植物染めには、触覚的にも嗅覚的にも豊かでホリスティックな実在感がある。なかば工業製品に収まってしまった現代の画材とは異なる、感覚的世界のたのしみを知らせてくれる貴重な美術教材であるといえる。

2. 研究の目的

この研究では、学生が植物染料を使った型染

めを制作するための参考として発色見本を試作した。植物染料での型染めには、伝統的な型糊を使用する「防染」と、新しい機能性型糊を使用する「抜染」、「着抜染」が考えられる。伝統的な技法は、生地を染める前に糊を置き、その部分を防染して文様を表現する。植物染液には乾いた糊の防染部分への浸透力があり、そのため文様の輪郭に滲みができやすい。伝統的な防染技法を用いてくっきりした文様を表現するには、糊作りと糊置きに熟練を要することになる。これに対して、新しい機能性型糊では、先に生地全体を地色に染めてから、文様を糊置きし、その部分を抜染あるいは着抜染（変換媒染）して地色から変化した色を発色させる。

筆者は、平成21年度の工芸授業で植物染料による型染めに取り組み、防染と着抜染の両方の技法を学生に指導してみた。防染ではやはり作品に色むらや滲みが生じ、また制作工程で技術的なミスが起りやすいことがわかった。着抜染は、地色と変換色を選ぶところから造形をスタートさせる。したがって、色によるデザインのイメージを段階的に描きやすいのではないかと思われた。造形の配色プロセスが把握しやすいのに加え、初心者でも明瞭な文様表現が簡単にできることがわかった。また、防染が基本的には地と図だけの単色の図柄になるのに対して、着抜染技法では、地色を複数の色に変換することが可能であり、多色作品を制作することができる。このような指導結果をふまえて、9種類の植物染料について制作指導用の資料としての着抜染発色見本を制作した。

3. 着抜染技法

植物染料の多くは、媒染によって発色すると同時に、不溶化して生地繊維に定着する。媒染料は、金属イオンを含む化合物の水溶液で、工芸染色用としては、錫、アルミニウム、チタン、銅、鉄の5種類の濃縮媒染液が市販されている。一般に、重い金属のほうが暗い色に発色する傾向がある。植物染料の着抜染技法は、同じ植物の染液であっても金属媒染液の種類を変えると発色が変化する性質を利用している。型染めでは、地色に使われている媒染料の金属を錫またはチタンに変換媒染する機能性型糊を用いる。したがって、アルミニウム、銅、鉄のいずれかで地色を媒染した生地では、糊置きした文様を錫またはチタン媒染の2色に変換することができ、地色が錫またはチタン媒染の場合は相互に1色に変換できる。このような金属着抜染では、地色と文様の両方が同じ植物染料の天然発色となっているので、落ち着いた、調和のとれた色調の作品になる。

植物染料では、以上の金属着抜染のほかに、媒染で発色した地色を還元する還元抜染と、同時にシリアス染料などの合成染料を混ぜて着染させる技法がある。植物用の還元抜染糊は、糊置きした部分の文様を媒染前の状態に戻し水溶化させる。水洗されやすい染料では、生地色に近い抜染ができるが、多少染液色が残るものもある。また、植物用還元剤の作用を受けずに加熱着染するシリアス染料を混ぜて生地を蒸すことで、媒染した植物染料の地色へのシリアス着抜染が可能である。植物染料を使った金属着抜染、還元抜染、シリアス着抜染は、同じ作品に併用することができる。

4. 生地と文様

発色見本の試作には麻生平（あさきびら）を用いた。これは、天然のまま撚りのかかっていない生平糸（きびらいと）が緯糸に織り込まれた生地である。緯糸の自然状態に応じて染まり具合が変化するので完全に均質とはならないが、植物染料の味わいのある発色テクスチャー

を引き出すことができる。約20cm幅の麻生平巻き（田中直染料店製「流星」）を長さ60cmに裁断し、両端を筒状にミシン縫いした。そこに塩化ビニール・パイプを差し込んで木綿ロープをかけ、水平に張れるようにした。文様には伝統的な家紋のデザインを応用した〔注1〕。型は洋型紙を使い、基本的形式として一枚の試作生地に2種類の着抜染文様を染めた。

5. 使用した植物染料の種類と特徴

この研究では、ログウッド、インド茜、すおう、えんじゅ、やまもも、かりやす、きはだ、くちなし、びわの葉の9種類の植物染料を使用した。ログウッドとインド茜についてはアルミ媒染と銅媒染、すおうについてはアルミ媒染と鉄媒染、これら以外の6種類については、アルミ媒染、チタン媒染、銅媒染、鉄媒染で地色を発色させ、合計30枚の発色見本を制作した。ここで試作に使った植物染料は、おおよそ次の3グループに分類ができる。

A：濃色系： ログウッド、インド茜、すおう
これらは、比較的短時間の煮出しで染液が得られる。ログウッドは、アルミ媒染または錫媒染で紫がかった青に発色する。空気中の酸化で発色させる藍の系統以外では、青を染められる数少ない植物染料である。また、銅媒染でやや緑味の黒、チタン媒染でシックな黒を発色する。学生に人気がある色でもある。インド茜とすおうは、アルミ媒染または錫媒染では、赤からピンクを発色する。

B：黄色系： えんじゅ、やまもも、かりやす、きはだ

基本的には同じ金属の媒染で類似した系統色に発色する。アルミまたは錫媒染で黄色、チタン媒染でカーキー色、銅媒染でオリーブまたは褐色、鉄媒染では黒に近くなる。えんじゅはとりわけ美しい黄色が得られるが、染液が冷えると色素が沈殿して使用できなくなるので、煮出しですぐ、熱いうちに引染めする。

C：くちなしとびわの葉

くちなしも代表的な黄色染料だが、えんじゅの系統とは少し色合いと性質が異なり、無媒染でも卵の黄身のような濃い黄色に染まる。直接染料に特性が似ていて、媒染ではなく加熱によって定着する。金属媒染した場合は錫，アルミ，チタン，銅媒染の順で次第に濃くなる黄から黄褐色のグラデーションが得られ、鉄媒染では渋いオリーブ色に発色する。びわの葉は、ややピンクをおびたパステル調のニュアンスを含む美しい褐色のグラデーションが得られる。

6. 引染めと糊置き

着抜染技法での地染めは、引染め（刷毛染め）をする。生地を両端に縫った折返しに塩化ビニール・パイプを差し、ひもを掛けて水平に張った。植物染液を、引くごとに乾燥させて、2回から3回引き、さらに10～20%に希釈した金属媒染液を引いた。この試作見本では、媒染で発色した地に直接、着抜染糊を型置きしてから、染色用蒸し器で30～45分蒸した。ただし、えんじゅについては、引染め、媒染と蒸しを2回したあとから糊置きをした。蒸しあがった生地を水洗して糊を落とし、植物染め用の柔軟剤につけて

から乾燥した。一部の生地には、シリアス着抜染の色見本を加えた。またくちなしでは、合成染料用の抜染剤を応用して文様の白抜きを試みた。

7. おわりに

この研究で使用した植物染料、媒染料、機能性型糊、麻生平及びその他の染色材料は、京都にある田中直染料店から購入した、同社の製品である。制作した30枚の発色見本のうち16枚を図版としてこの研究報告に添付した。また、植物染料発色見本全30枚のカラー画像を、岐阜大学教育学部のホームページ〈講座紹介→美術教育講座→谷 誉志雄 <http://www1.gifu-u.ac.jp/~ytani/>〉で公開する。ここで報告した染色作品の制作は、2009年6月から8月にかけて実施した。

注

1) 日本の家紋 デジタル版，青幻舎，2006に収録された伝統的家紋のデザイン・データを一部編集して型の制作に使用した。



図1 ログウッド アルミ媒染
錫着抜染
チタン着抜染



図2 ログウッド 銅媒染
錫着抜染
チタン着抜染



図3 インド茜 アルミ媒染
チタン着抜染
シリアス着抜染
錫着抜染



図4 インド茜 銅媒染
錫着抜染
チタン着抜染

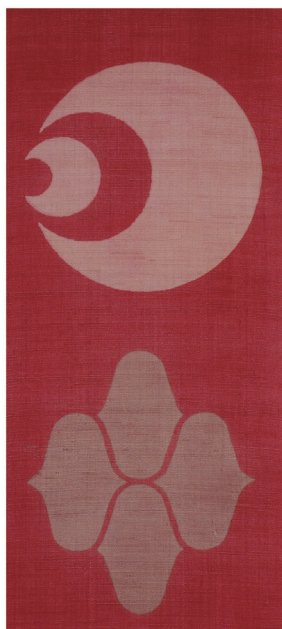


図5 すおう アルミ媒染
錫着抜染
チタン着抜染



図6 すおう 鉄媒染
錫着抜染
シリアス、チタン着抜染



図7 えんじゅ アルミ媒染
チタン着抜染
錫着抜染



図8 えんじゅ チタン媒染
錫着抜染
シリアス着抜染



図9 びわの葉 アルミ媒染
錫着抜染
チタン着抜染



図10 びわの葉 チタン媒染
錫着抜染
シリラス着抜染



図11 くちなし チタン媒染
錫着抜染
シリラス色糊着染



図12 くちなし 鉄媒染
錫着抜染
チタン着抜染



図13 きはだ 鉄媒染
錫着抜染
チタン、シリラス着抜染



図14 かりやす チタン媒染
錫着抜染
シリラス着抜染



図15 やまもも 銅媒染
錫着抜染
チタン着抜染



図16 やまもも 鉄媒染
錫着抜染
チタン着抜染

植物染料発色見本の画像を〈<http://www1.gifu-u.ac.jp/~ytani/>〉で公開する。